

令和元年度 第3回考古学講座

# 神奈川県発掘調査成果発表会 2019

◆ 日 時

令和元年7月27日(土) 13:30 ~ 16:30 (開場 13:00 ~ )

◆ 口頭発表

13:35~14:05	「船久保遺跡 第5次調査」(横須賀市) 前川 昭彦(株式会社 玉川文化財研究所)	—	1
14:05~14:35	「中野中里遺跡」(相模原市) 吉田 浩明(株式会社 玉川文化財研究所)	—	3
14:35~14:40	休憩		
14:40~15:10	「七ノ城遺跡 第9地点」(平塚市) 市川 正史(株式会社 アーク・フィールドワークシステム)	—	5
15:10~15:40	「平塚城跡 第2地点」(平塚市) 北平 朗久(株式会社 玉川文化財研究所)	—	7
15:40~16:10	「西富岡・長竹遺跡 第5次調査、 上粕屋・石倉下遺跡 第2次調査」(伊勢原市) 小森 明美(株式会社 玉川文化財研究所)	—	9
16:10~16:25	質疑応答		

◆ 紙上発表

「小菅ヶ谷町新宿やぐら群」(横浜市) 碓井 三子(有限会社 吾妻考古学研究所)	—	11
「矢作横穴墓群」(三浦市) 伊藤 貴宏(株式会社 玉川文化財研究所)	—	13
「川尻遺跡Ⅳ」(相模原市) 中村 哲也(株式会社 玉川文化財研究所)	—	15
「西富岡・中島遺跡 第3次調査、西富岡・長竹遺跡 第6次調査、西富岡・長竹2遺跡 第2次調査」(伊勢原市) 相川 薫(株式会社 パスコ)	—	17

会 場：かながわ県民センター2階ホール

主 催：神奈川県教育委員会 教育局 生涯学習部 文化遺産課  
中村町駐在事務所(神奈川県埋蔵文化財センター)

旧石器時代の長方形の陥し穴状土坑列を全国で初めて発見

ふなくぼ

## 船久保遺跡 第5次調査

**所在地** 横須賀市林五丁目地内  
**調査期間** 平成29年12月4日  
～平成30年12月21日  
**調査面積** 6,127 m<sup>2</sup>  
**調査組織** 株式会社玉川文化財研究所  
**担当者** 前川昭彦・石川真紀

**調査概要** 本遺跡は京浜急行電鉄久里浜線三崎口駅の北約4kmに位置します。地勢的には市域南西部の相模湾側にあたり、小田和湾を眼下に見渡す標高約40mの丘陵上に立地します。今回、船久保遺跡の調査終了にあたって、船久保遺跡の旧石器時代を中心に報告します。

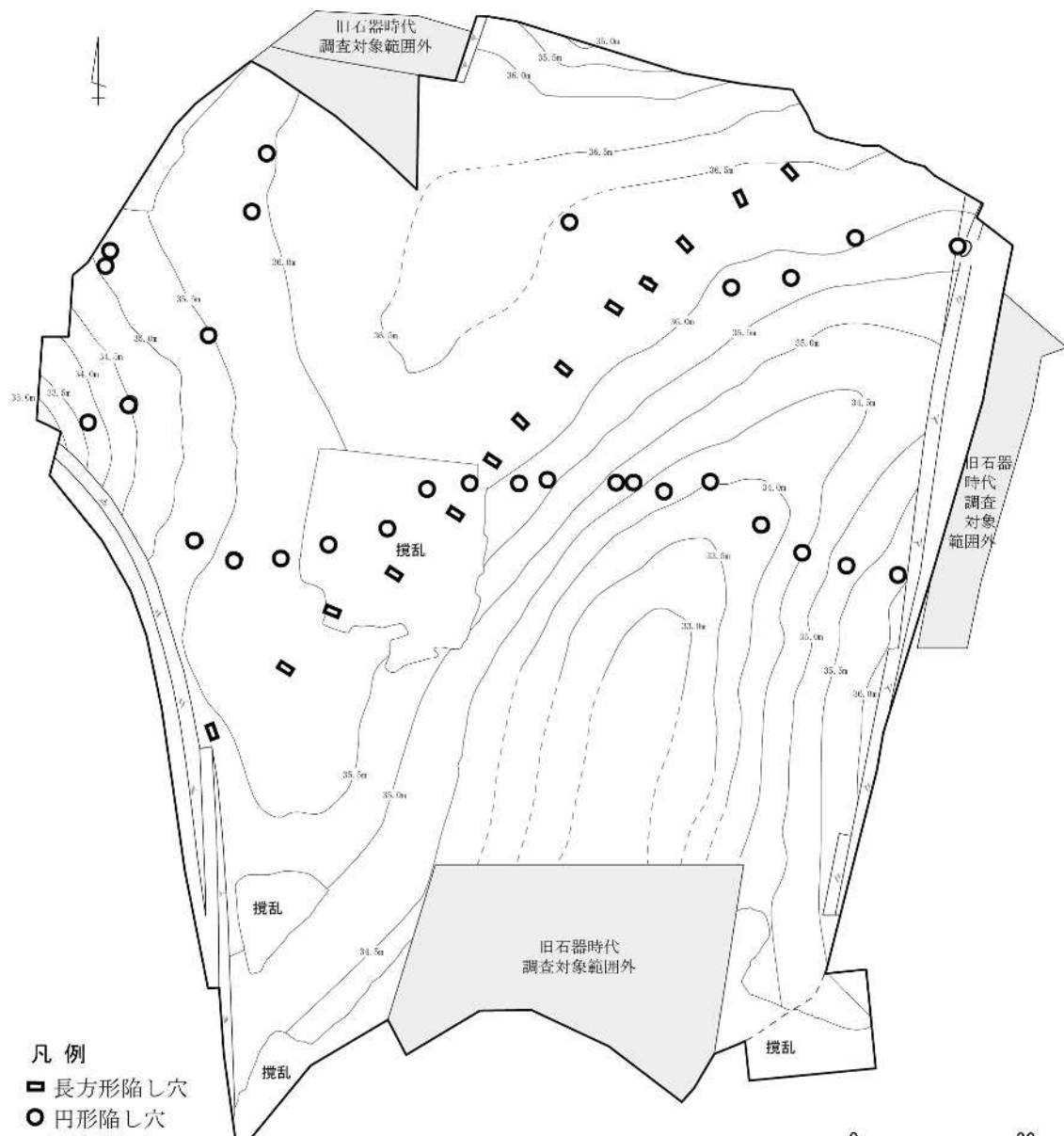


第1図 遺跡位置図 (1/50,000)

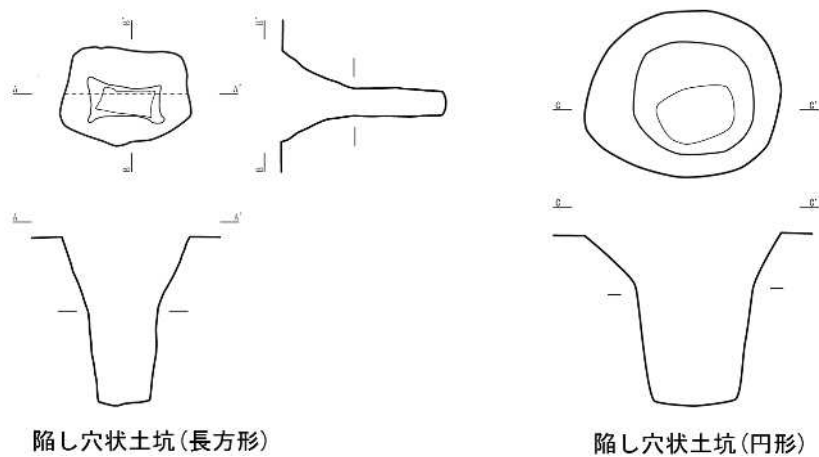
本遺跡の旧石器時代調査では、前回調査までに相模野B1層からL5層(約2.1～3.3万年前)にかけて約5,000点の遺物が出土し、これらは少なくとも5時期に分かれることが明らかとなりました。遺構としては、各時期で石器集中部や礫群などが見つかったほか、相模野B3層(約3万年前)を掘り込み面とする陥し穴状の土坑が7基発見され、そのうち2基の平面形は、四隅が突出する特徴的な長方形であることがわかっています。

これらの調査結果を踏まえた今回の調査では、微細な剥片石器を中心に約10,000点の遺物が発見され、これまでの遺物総点数は約15,000点となりました。各時期で石器集中部や礫群が見つかりましたが、特にB4層下部(約3.3万年前)では、丘陵頂部と埋没谷底部でそれぞれ大規模な石器集中部が認められました。この時期に特徴的な台形様石器や、第4次調査で完形品が出土した局部磨製石斧の破片資料も見つかっています。また、陥し穴状の土坑は、検出した数が最終的に円形29基、長方形13基の計42基となり、掘り込み面や覆土の違いから円形の土坑よりも長方形の土坑の方が新しいことがわかりました。これらの土坑は、調査によって確認された埋没谷を中心に列状に配置されており、円形土坑は谷頭に1列、埋没谷西側の尾根を横切るように1列、そして調査区中央付近を埋没谷から尾根にかけて蛇行しながら東西に横断する1列の計3条が認められました。一方で長方形土坑は13基全てが1列をなし、土坑の長軸が谷筋に直交する向きで埋没谷の西側縁辺に沿ってほぼ直線上に並ぶことが明らかとなりました。

**まとめ** 今回の旧石器時代の調査で大量に発見された石器群については、現在、前回までの調査で発見された石器も含めて、全体的な内容を精査しています。また遺構としては、旧石器時代の陥し穴状土坑は全国的にみても希少な出土例であり、特に長方形の土坑列はこれまで類例がなく、貴重な事例を加えることとなります。本遺跡では、このような時期や形状の異なる土坑列が、地形を意識しながら構築されていることがわかりました。(前川昭彦)



第2図 旧石器時代遺構配置図[S=1/800]



平安時代の鉄鐸が県内で初めて出土

なかのなかざと

## 中野中里遺跡

**所在地** 神奈川県相模原市緑区 937-2

**調査期間** 平成30年1月29日～7月31日

**調査面積** 1823.8㎡

**調査組織** 株式会社玉川文化財研究所

**担当者** 吉田浩明・河合英夫・中山 豊

**調査概要** 神奈川県による津久井合同庁舎新築工事に伴い調査を行いました。相模川上流域の津久井湖（人造湖）右岸の河岸段丘上に立地しています。標高は164m前後を測ります。相模川を下った東方2kmには中世の山城である津久井城跡がそびえ、南西200mには近代まで津久井往還として重要な交通路であった相模津久井線が東西に延びています。



第1図 遺跡位置図 (1/50,000)

**縄文時代～弥生時代中期** 焼土址2基（A区）、土坑

10基（A区1基、B区9基）、ピット群2カ所（A区とB区）が発見されました。B区の土坑9基のうち2基は、弥生時代中期前半の可能性をもっており、本遺跡の一带では初めての遺構発見例となります。残りの7基は深さや並び方からみて縄文時代中期～後期にかけての陥し穴列と考えられます。

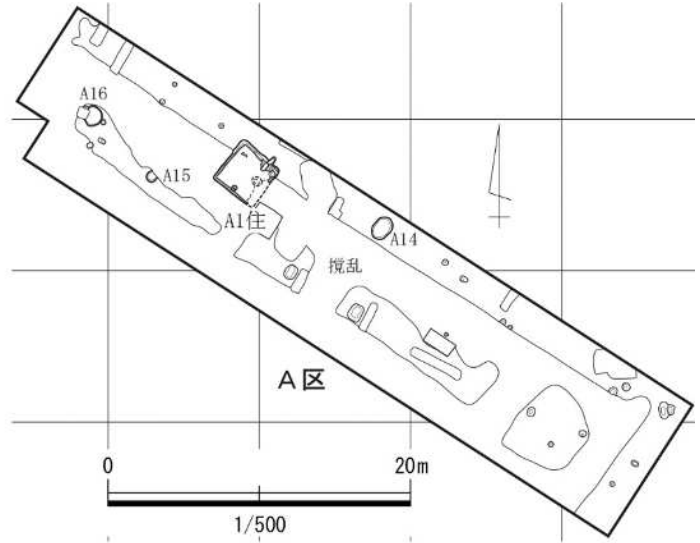
**古墳時代後期～奈良・平安時代** 竪穴住居址3軒（A区1軒、B区2軒）、掘立柱建物址7棟（B区のみ）、土坑16基（A区3基、B区13基）、ピット112基（A区23基、B区89基）が発見されました。竪穴住居址の時期は、A1号住が古墳時代後期（7世紀前半）、B1・2号住が平安時代（9世紀後半～10世紀初頭）となり、掘立柱建物址はB1・2号住と同じ時期に作られたものと考えられます。これらの遺構からは土師器、須恵器、灰釉陶器、鉄製品が出土しました。B2号住の貯蔵穴から出土した鉄鐸は、神奈川県で初めての出土例となるもので、全長7.4cm、幅2.4～2.7cm、重さ41.8gを量る完形品で、吊るすための鈕や振り子状の舌が残っています。

**近世以降** 井戸址1基（B区）、土坑61基（A区13基、B区48基）が発見されました。土坑の大部分は細長い形態のもので、農業に伴うイモ穴（貯蔵用）と考えられます。この他に仔牛を埋葬した土坑が3基発見されています。出土遺物は、近世の陶器、磁器、砥石や近代の陶器、磁器、瓦などが出土しています。

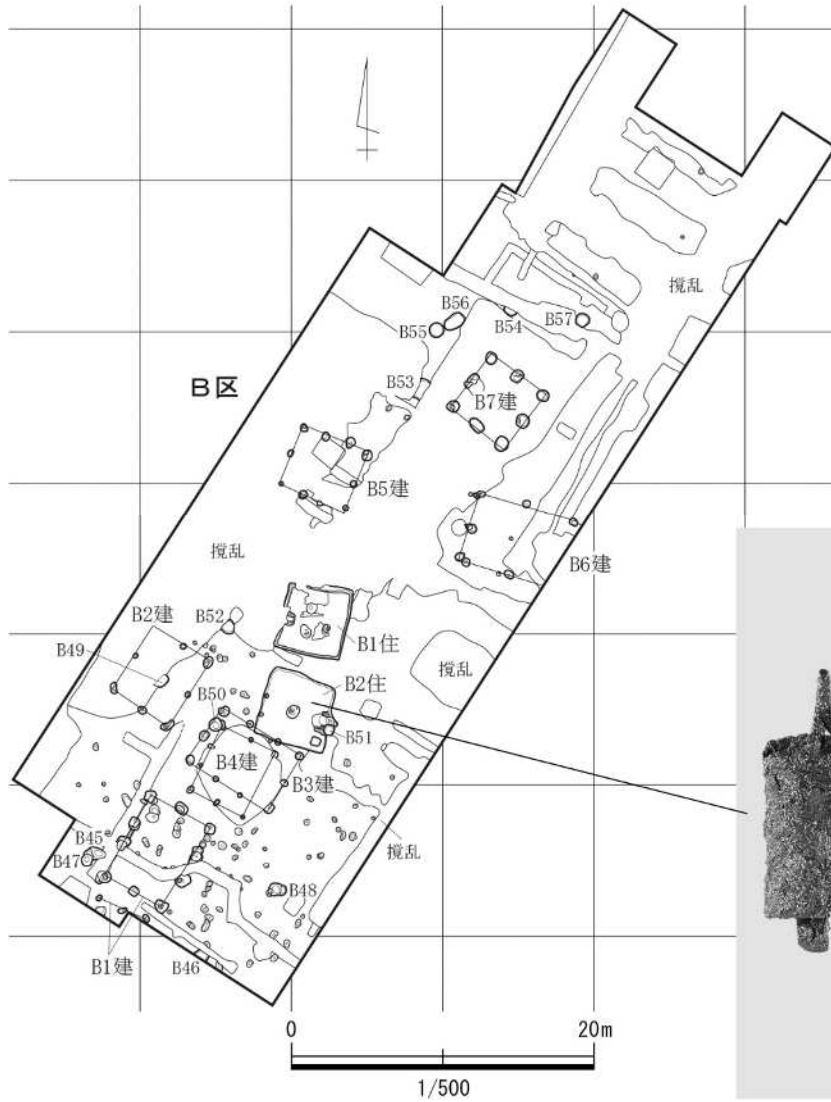
**まとめ** 貴重な発見となった平安時代の鉄鐸については、他地域での出土例を参考にすると山間域の集落で行われる祭祀の一例と類推することができます。本遺跡の一带ではまだ不明な点の多い弥生時代については、今回の調査により新たな調査事例を加えることができました。また、旧津久井地域では大正時代の中頃に乳牛の飼育が始まったとされていますが、今回発見された仔牛の埋葬土坑3基は、津久井の酪農史に関わるものとして位置付けられます。（吉田浩明）



遠景写真（北西から）  
手前：調査地、奥：津久井城跡



凡例  
住—竪穴住居址  
建—掘立柱建物址  
英数のみ—土坑



A区とB区の位置関係



B 2号住出土の鉄鐮

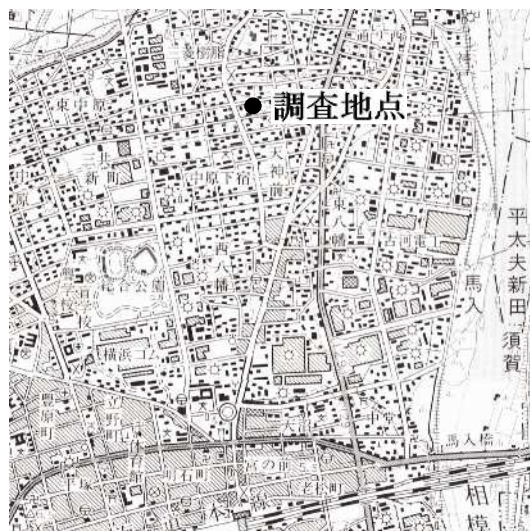
第2図 古墳時代後期～奈良・平安時代の遺構分布図、調査区遠景写真、鉄鐮写真

奈良・平安時代の相模国府推定域で集落の広がりを確認

ななのいき

## 七ノ城遺跡 第9地点

**所在地** 平塚市東真土一丁目 453-1B  
**調査期間** 平成30年5月7日～7月5日  
**調査面積** 313m<sup>2</sup>  
**調査組織** ㈱アーク・フィールドワークシステム  
**担当者** 市川正史・高杉博章  
**調査概要** 神奈川県平塚土木事務所による都市計画道路3・3・6号湘南新道街路整備に伴う調査で、遺跡は平塚市の市街地に広がる砂丘地域の砂丘列3列に所在しています。今回の調査地点は、県教委の確認調査で新たに追加されたもので、遺跡の西側に角状に張り出した西端部に位置しています。



第1図 遺跡位置図(1/50,000)

**近世** 耕作跡5箇所、土坑2基、ピット11基

など耕作関連遺構が調査区のほぼ全域に展開しており、周辺調査地点を含め、一帯が耕作地域であったことがうかがえます。

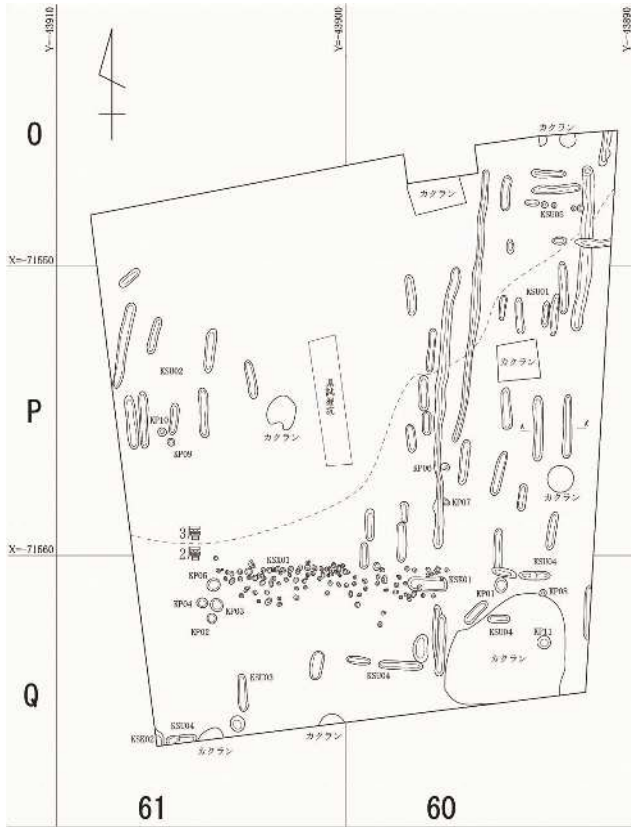
**中世** 土坑4基・溝状遺構2条・ピット2基と遺構は少なく、当時の土地活用の状況は明らかではありません。

**古墳時代～奈良・平安時代** 竪穴建物跡8棟・掘立柱建物跡2棟、円形土坑を中心とする土坑120基、溝状遺構4条、ピット97基などが検出されました。これら遺構の上部は中世以降の削平により大きく失われており、当時の地形は高い砂丘上に立地していたことがうかがえます。竪穴建物跡の年代は8世紀前葉～10世紀前葉にかけてで、8世紀後葉をピークに徐々に減少するようです。掘立柱建物跡のうち1棟は竪穴建物跡との重複関係から、8世紀前～中葉の時期と考えています。また調査区東端を南北に走行する溝状遺構は9世紀後葉の所産で、土地の区画溝の可能性が考えられます。本調査地点で特徴的なのは土坑の数が異常に多いことで、それらは竪穴建物跡や溝状遺構との重複がみられ、奈良・平安時代の全時期にわたって造られていることがわかりましたが、用途・性格を明らかにすることはできませんでした。

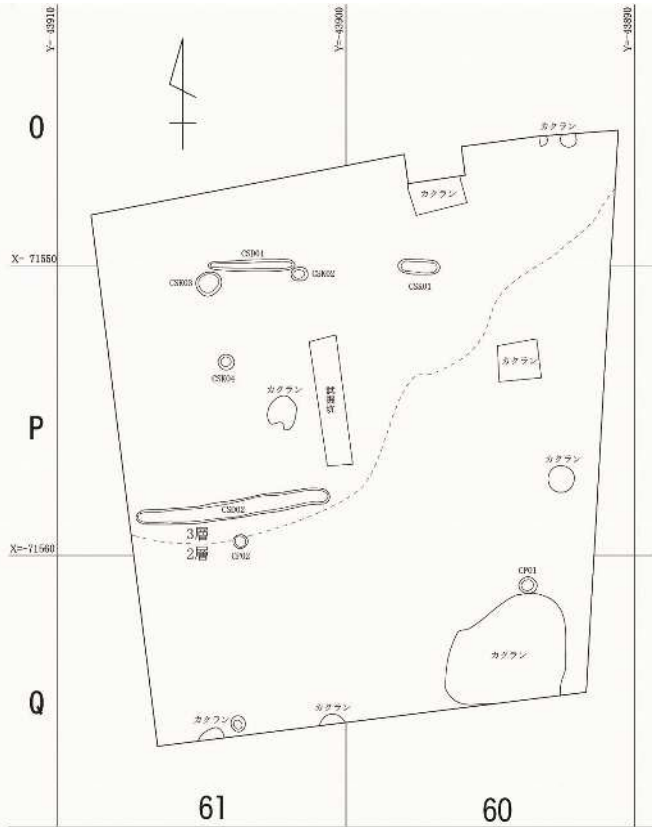
**縄文時代** 遺構確認の際、黒曜石製の石鏃1点が出土しました。本遺跡では第2地点で中期の土器片が出土しています。

**まとめ** 相模国府推定域の中央北側に位置する七ノ城遺跡では、これまでに8地点の調査が行われており、そのうち6地点で古墳時代後期～奈良・平安時代の竪穴建物跡・掘立柱建物跡が確認されています。これまで、本遺跡の西側約100m離れた山王B遺跡との間は、遺跡の空白地帯といわれていましたが、本地点で集落遺跡の存在が明らかになり、空白地帯の様相は再検討が必要となつたといえましょう。(市川正史)

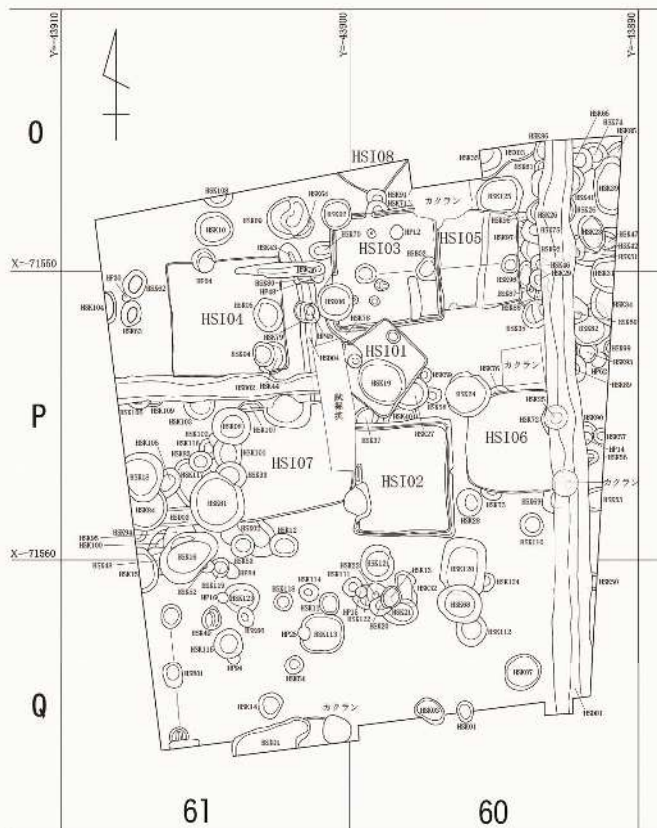




第2図 近世遺構配置図



第3図 中世遺構配置図



第4図 古墳時代～奈良・平安時代遺構配置図

0 10m

奈良・平安時代の国府域周辺集落と中世の城跡に関連する可能性がある溝状遺構

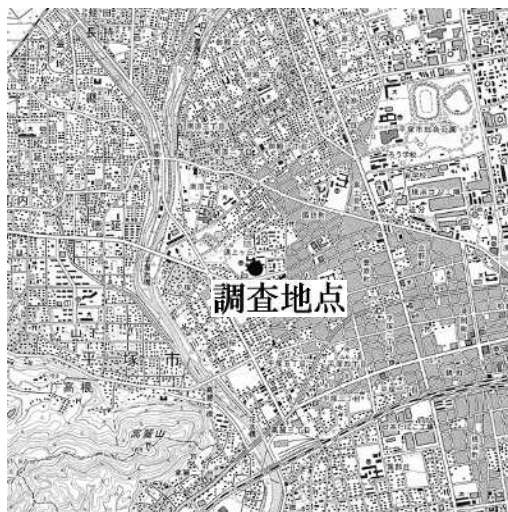
ひらつかじょうせき

## 平塚城跡 第2地点

**所在地** 平塚市達上ヶ丘10-10  
**調査期間** 平成30年6月11日～  
令和元年6月30日(予定)

**調査面積** 約1,384㎡  
**調査組織** 株式会社玉川文化財研究所  
**担当者** 北平朗久・小林晴生

**調査概要** 今回の調査は、平塚農業高校商業教育棟新築工事に伴う事前調査として実施しました。遺跡は平塚市南西部の砂丘上に立地し、近世以降、中世、古墳時代後期～奈良・平安時代の計3面の遺構面を確認しました。



第1図 遺跡位置図(1/50,000)

**近世以降** 竪穴状遺構4基、溝状遺構4条、畝状遺構111条、道状遺構2条、土坑85基、宝永火山灰集積遺構9基、ピット104基、煉瓦積み遺構1基を検出しました。竪穴状遺構は調査区のほぼ中央から検出され、東西方向に4基が直線的に並びます。その両端には階段状の施設を有し、防空壕と考えられます。畝状遺構は南北に延び、その多くは並行関係にあるため、耕作に関連する溝と推定されます。宝永火山灰集積遺構は、宝永火山灰を集めて廃棄した施設と推定されます。出土遺物は希薄ですが、瀬戸・美濃系、肥前系の陶磁器などが出土しました。

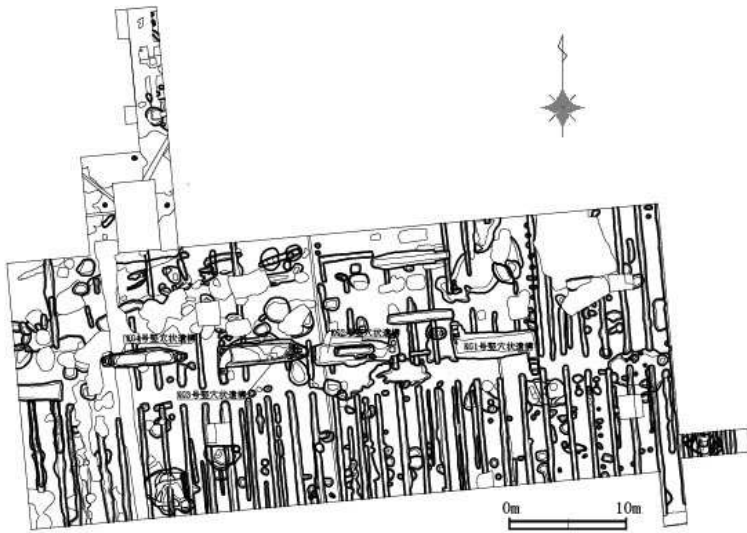
**中世** 竪穴状遺構11基、溝状遺構4条、土坑75基、土坑墓1基、ピット73基を検出しました。出土遺物は皆無に等しく、出土遺物からの詳細な時期は不明ですが、C7号溝状遺構は上幅が3m前後、断面形は幅広のU字形を呈する比較的大きな溝で、石臼の破片が出土しました。また、C4号竪穴状遺構からは龍泉窯系青磁の小破片が出土しました。

**古墳時代後期～奈良・平安時代** 竪穴住居址38軒、掘立柱建物址1棟、竪穴状遺構5基、溝状遺構14条、土坑151基、ピット177基を検出し、これらは奈良・平安時代のものが中心です。出土遺物は、主に土師器、須恵器などで、特殊な遺物として石製品(丸鞆<sup>まるとも</sup>)が出土しました。(5月末日現在)

**縄文時代** 遺構は検出されていませんが、石鏃が2点出土しています。

**まとめ** 今回の調査では、近世以降、中世、古墳時代後期～奈良・平安時代の遺構・遺物が検出されました。近世以降では、防空壕と考えられる竪穴状遺構が検出されています。それ以前には畝状遺構が多く存在したことから、畑などの生産域として利用されていたと推定されます。中世では明確な帰属時期や詳細は不明ですが、C7号溝状遺構は規模が比較的大きい溝であることから、平塚城跡関連の遺構の可能性も考えられます。古墳時代後期～奈良・平安時代では、主に奈良・平安時代の竪穴住居址が中心で、国府域の周辺に形成された集落と考えられます。遺物には竪穴住居址の床下から出土した丸鞆が含まれ、役人が着用した腰帯具の一部ですが、その出土状況から地鎮としての使用が考えられます。(北平朗久)

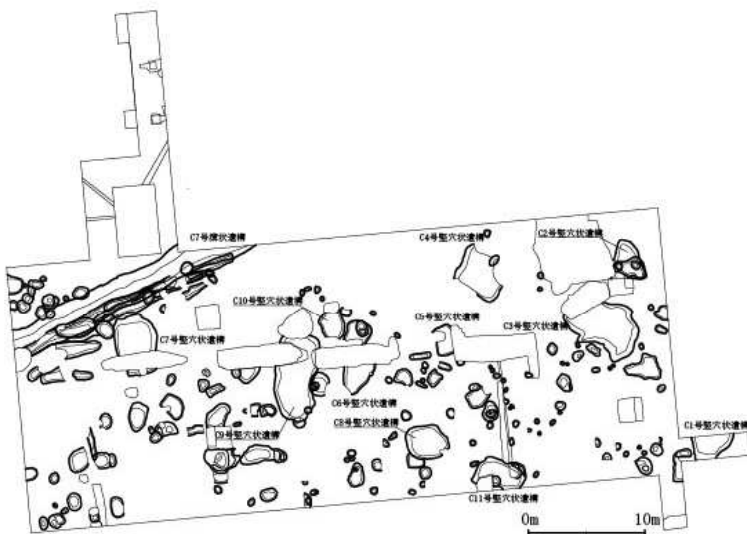




第2図 近世以降遺構配置図 (S=1/700)



近世以降 調査区全景 (北東から)



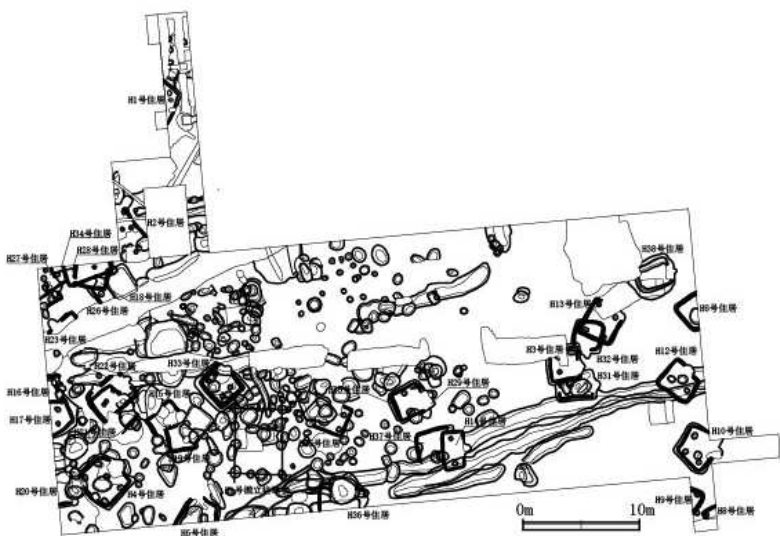
第3図 中世遺構配置図 (S=1/700)



C7号溝状遺構全景 (南から)



H4号竪穴住居址全景 (南西から)



第4図 古墳時代後期～奈良・平安時代遺構配置図 (S=1/700)

※5月末日現在



H1号掘立柱建物址全景 (南から)

にしとみおか    ながたけ    かみかすや    いしくらしも  
西富岡・長竹遺跡第5次調査、上粕屋・石倉下遺跡第2次調査

**所在地** 伊勢原市西富岡字長竹981-15  
(西富岡・長竹遺跡)  
伊勢原市上粕屋字石倉下1243-4外2筆  
(上粕屋・石倉下遺跡)

**調査期間** 平成30年3月6日～7月26日  
(西富岡・長竹遺跡)  
平成30年3月28日～9月6日  
(上粕屋・石倉下遺跡)

**調査面積** 101㎡(西富岡・長竹遺跡)  
39㎡(上粕屋・石倉下遺跡)

**調査組織** 株式会社玉川文化財研究所

**担当者** 小森明美・秋山重美

**調査概要** 今回の調査は、県道603号(上粕屋厚木)

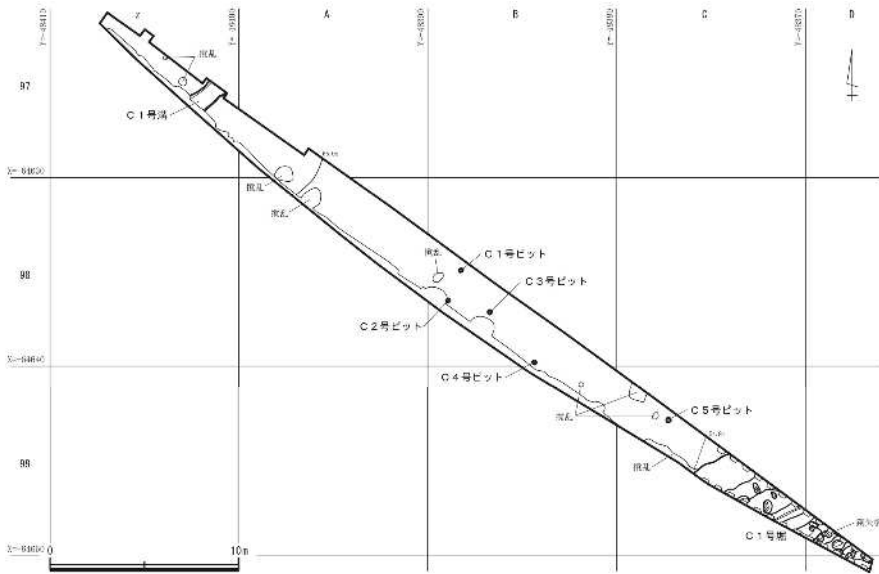
道路改良工事に伴う事前調査として、西富岡・長竹遺跡および上粕屋・石倉下遺跡という異なる2カ所の遺跡で調査を実施しました。

**西富岡・長竹遺跡第5次調査** 調査区は渋田川とその支流に挟まれた痩せ尾根上の台地縁辺に位置します。今次調査では近世・中世・縄文時代の遺構が発見されました。主な遺構は中世の開削と推測される堀状遺構で、断面形がV字形を呈し、推定幅8.5m、深さ3.1mを測る大規模な溝状の遺構です。隣接する第1次調査で発見された堀状遺構の延長部分に該当し、今次調査では法面(壁面)に形成された階段状の平場やピットが検出されました。これらは第1次調査では発見されていないもので、今回も部分的な調査であるためピットの配置や対応関係を捉えられず、機能や性格などの詳細は不明です。現状では堀状遺構を渡る橋などの施設の一部である可能性が考えられます。

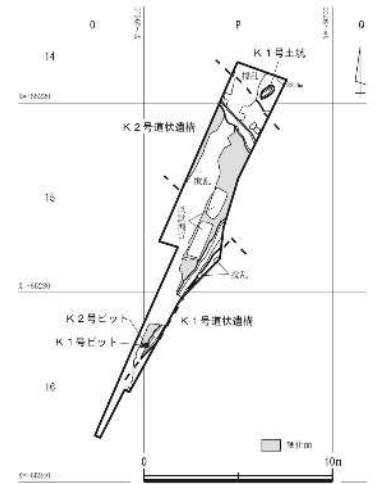
**上粕屋・石倉下遺跡第2次調査** 調査区は上粕屋扇状地の西側縁辺付近に位置します。近世の遺構・遺物と縄文土器が発見され、近世において、既存の道に新たに道が接続して交差点になるという変遷過程が明らかになりました。先につくられたK2号道状遺構は大山方面に向かう道で、17世紀代には開通しています。17世紀後葉にK1号道状遺構が接続し、丁字状の交差点になりました。この2条の道状遺構は、1825年「<sup>かみかすやごうえす</sup>上粕屋郷繪圖」に認められ、K1号道状遺構は三ノ宮村方面への道、K2号道状遺構は大山道の一つである「田村通り」と確認されました。2条の道は1876年頃の「上粕屋村絵図」、1882年の「フランス式彩色地図」にも描かれており、継続して利用されていたことが読み取れます。「田村通り」は現在通行できませんが今なお道の名残をとどめ、三ノ宮村への道は現在も残っています。(小森明美)



第1図 遺跡位置図 (1/50,000)



第2図 西富岡・長竹遺跡  
中世遺構分布図 (1/400)



第3図 上粕屋・石倉下遺跡  
近世遺構分布図 (1/400)



写真1 西富岡・長竹遺跡  
C1号堀状遺構土層断面



写真2 西富岡・長竹遺跡  
C1号堀状遺構南東側法面



写真3 上粕屋・石倉下遺跡  
K2号道状遺構



写真4 上粕屋・石倉下遺跡  
K2号道状遺構土層断面



近世以降に再利用された横浜のやぐら  
こす が や ちようしんじゆく  
小菅ヶ谷町 新宿やぐら群

**所在地** 横浜市栄区小菅ヶ谷二丁目  
1496-2 番地先・他

**調査期間** 平成 30 年 8 月 20 日～ 9 月 3 日

**調査面積** 15.2 m<sup>2</sup>

**担当者** 碓井三子・有馬多恵子

**調査概要** 本遺跡は、横浜市の南部に位置しています。東西に流れる<sup>いたち</sup> 鮎川の北側に広がる丘陵に入り込んだ<sup>やと</sup> 谷戸の崖面から、中世のやぐら 2 基が見つかりました。

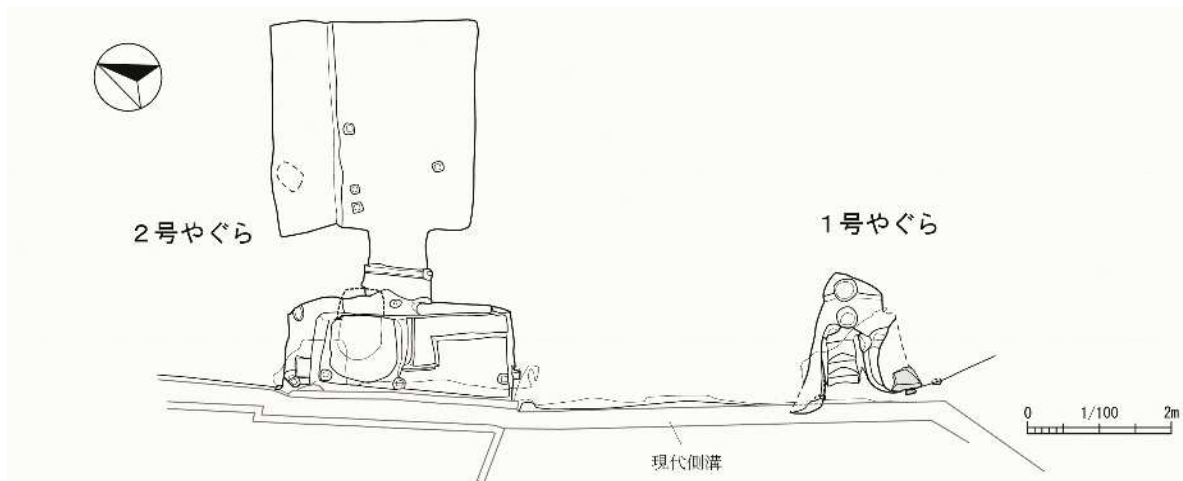
1 号やぐらは、現在の地面から約 2 m の高さにやぐらの<sup>げんしつ</sup> 玄室があって、地面のやや上から階段が 3 段作られていました。玄室は大幅に崩れていましたが、奥側と左右の壁の一部が残っていました。残っていた部分の大きさは幅が約 1 m、奥行きが 0.76 m でした。玄室内には<sup>ごりんとう</sup> 五輪塔（14 世紀頃）が残っていて、その奥から火葬骨が納められた蓋付きの<sup>こつぞうき</sup> 骨蔵器（19 世紀中頃）が見つかりました。しかし、調査の結果、五輪塔は何度も崩れ落ちて本来の形で設置されておらず、骨蔵器も近世以降に納められたものであることが解りました。階段は骨蔵器が埋納された際に設けられた可能性が考えられます。この他に、近世の陶器の<sup>とうみょうざら</sup> 灯明皿（18 世紀後半～19 世紀前半）が出土しています。

2 号やぐらは、第 2 次世界大戦中には防空壕として利用されていたため、玄室の中は現代の廃棄物が捨てられていました。しかし、1 号やぐらよりは残りがよく、開口部の奥に<sup>せんどう</sup> 羨道・玄室があり、開口部の前には<sup>ぜんていぶ</sup> 前庭部が造られていました。玄室は平面形が方形で、大きさは幅が 2.62 m～2.85 m、羨道の開口部からの奥行きは 3.86 m、天井高が最大で 2.08 m ありました。前庭部は、幅 3.14 m、奥行きは残存部で 1.34 m、深さは最大約 0.9 m の範囲で掘り込まれていて、南側が階段状、北側が土坑状になっていました。土坑状部分の東側壁面には高さ 47 cm、幅 63 cm、奥行きが 41 cm の横穴が掘られており、横井戸もしくは排水施設であったと推定されます。前庭部からは、中世（14～16 世紀頃）の<sup>せつき</sup> 炆器甕片や馬骨片が少量出土しています。

**まとめ** 今回調査されたやぐらは、新規に「小菅ヶ谷町新宿やぐら群」として登録された遺跡です。残念ながら 2 基共に近世や現代に再利用されていたため、詳細な構築時期を把握することができませんでした。しかし、調査区域周辺には、現在でも崖面に横穴の開口部が点在しており、これらの中には未調査のやぐらが残っている可能性があります。（碓井三子）



第 1 図 遺跡位置図 (1/50,000)



第2図 遺跡配置図 (1/100)



写真1 1号やぐら五輪塔検出状況 (西から)



写真2 1号やぐら全景 (南西から)



写真3 2号やぐら全景 (北西から)



写真4 2号やぐら前庭部 (北西から)



## 相模湾に面する古墳時代の横穴墓の調査

やはぎよこあなぼぐん

# 矢作横穴墓群

**所在地** 三浦市初声町和田地内

**調査期間** 平成31年3月5日～4月16日

**調査面積** 約22m<sup>2</sup>

**調査組織** 株式会社玉川文化財研究所

**担当者** 伊藤貴宏・秋山重美

**調査概要** 本調査は円徳寺境内における急傾斜地崩壊対策工事に伴う記録保存調査として実施しました。

矢作横穴墓群（三浦市No.45 遺跡）は三浦市の北西部、京浜急行電鉄久里浜線三崎口駅の北西約1.6 kmに位置します。地勢的には、西側で相模湾に面する矢作台地の南側崖面に位置しており、標高は台地上で約25m、海岸沿いの平坦面で3～4mを

測ります。本横穴墓群が立地する矢作台地南東側崖面には多数の横穴墓とやぐらの存在が知られており、東側に隣接する矢作・和田やぐら群の調査によって現在までに31基の横穴墓と35基のやぐらが確認されています。

**古墳時代** 調査を行ったのは横穴墓3基で、矢作横穴墓群内においては相模湾寄りの最も西側に位置します。調査範囲の制約から、いずれも玄室奥壁とその両側壁の一部のみの調査のため、全容を明らかにすることはできませんでした。加えて、崖面の崩落や後世の改変・転用などの影響もあって遺存状態は必ずしも良くありませんでした。3基はいずれも南東側に開口する横穴墓で、北東-南西方向の約12mの範囲に近接して築造されていました。また、垂直分布の関係で比較してみると、玄室奥壁側の床面は標高9.7～9.8mに収まり、いずれもほぼ同一レベルで築造されていました。

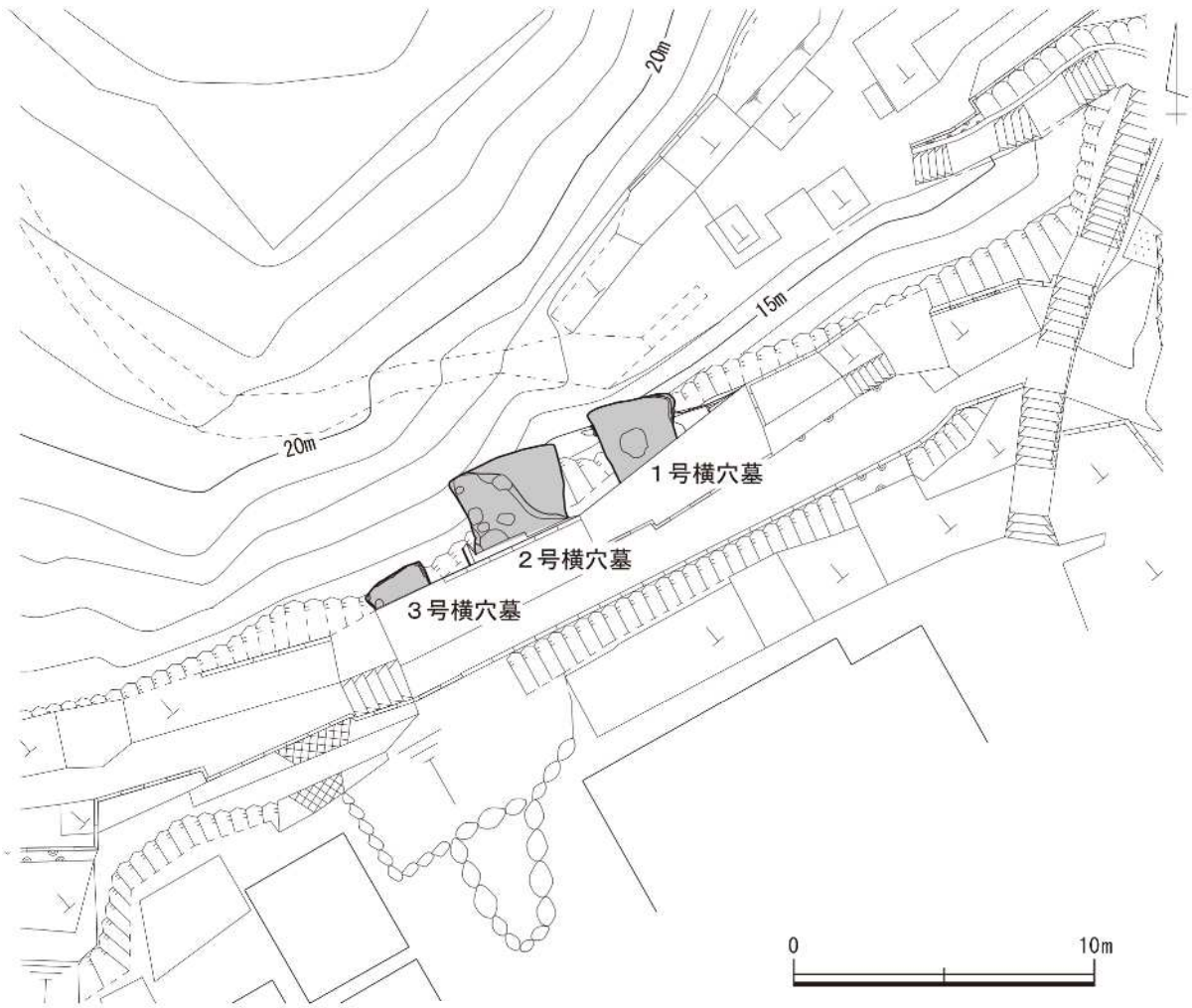
構造面では、いずれも開口部に向かって窄まる構造を特徴としていることから、平面形は撥形ないし羽子板状であったと考えられます。奥壁の形状はアーチ形を呈します。礫床や埋葬に関わる付帯施設は確認できませんでした。各横穴墓の玄室奥壁の規模は、1号が幅2.89m、高さ2.25m、2号は幅3.95m、高さ2.50m、3号は幅2.15m、高さ1.74mであり、1・2号は矢作・和田地区の横穴墓の中でも大形の部類に入ります。なお、各横穴墓に伴う遺物は出土しませんでした。

**近世以降** 埋葬人骨1基、ピット7基を確認しました。いずれも横穴墓玄室内につくられていたものです。なかでも埋葬人骨は3号横穴墓の床面上に集積された状態で出土し、周辺から出土した肥前産磁器や寛永通寶をもとに判断すると近世の埋葬事例であると考えられます。

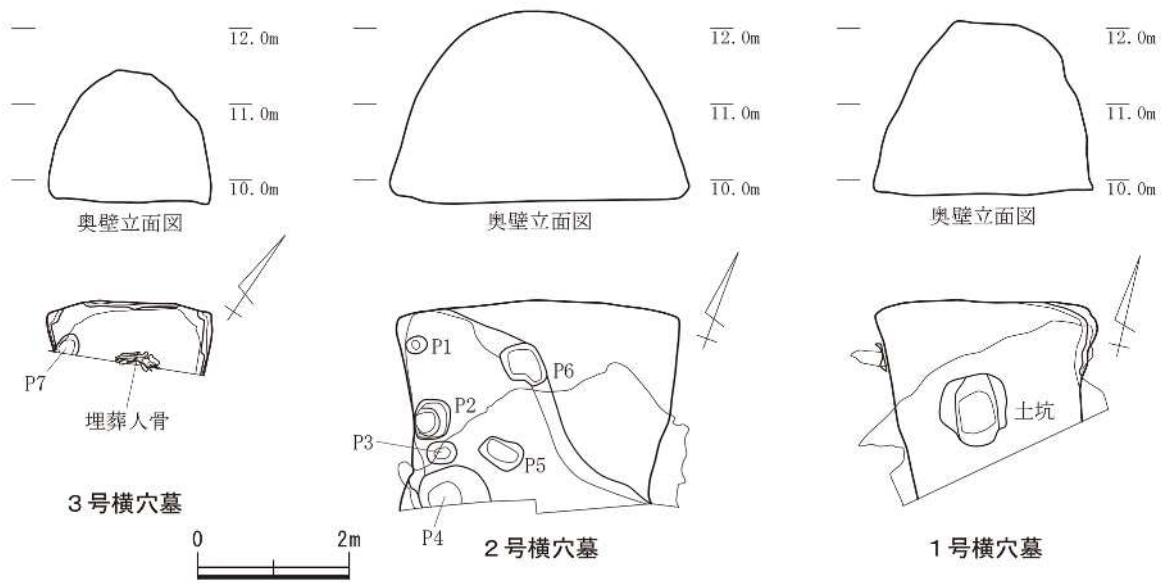
**まとめ** 3基の横穴墓は、時期の詳細は不明ですが、7世紀代の範疇と推測されます。矢作横穴墓群の構成を検討する上で資料を追加することができたのは大きな成果と考えられます。（伊藤貴宏）



第1図 遺跡位置図 (1/50,000)



第2図 遺構配置図 (S=1/250)



第3図 1~3号横穴墓 (S=1/100)

近代の斜坑と縄文時代の人面装飾付土器を発見

かわしり

## 川尻遺跡Ⅳ

**所在地** 相模原市緑区谷ヶ原2丁目740-1、  
741-1

**調査期間** 平成30年6月7日～8月29日

**調査面積** 89㎡

**調査組織** 株式会社玉川文化財研究所

**担当者** 中村哲也・小林義典

**調査概要** 今回の調査は、神奈川県企業庁谷ヶ原浄水場の排水処理施設更新工事に伴う事前調査として実施しました。遺跡は相模原市中央北部に所在し、地形的には八王子構造線付近の相模野台地北西端部に該当します。遺跡の南側には県内最大河川の相模川が、東側には相模川支流谷津川がそれぞれ南流しています。遺跡の標高は現地表面で約142m、相模川との比高差は約75m、谷津川との比高差は約20mを測ります。また、川尻遺跡内の国史跡指定範囲（川尻石器時代遺跡）南限からは南方約100mの距離にあります。調査の結果、近代、奈良・平安時代、縄文時代に属する遺構と遺物を検出しました。



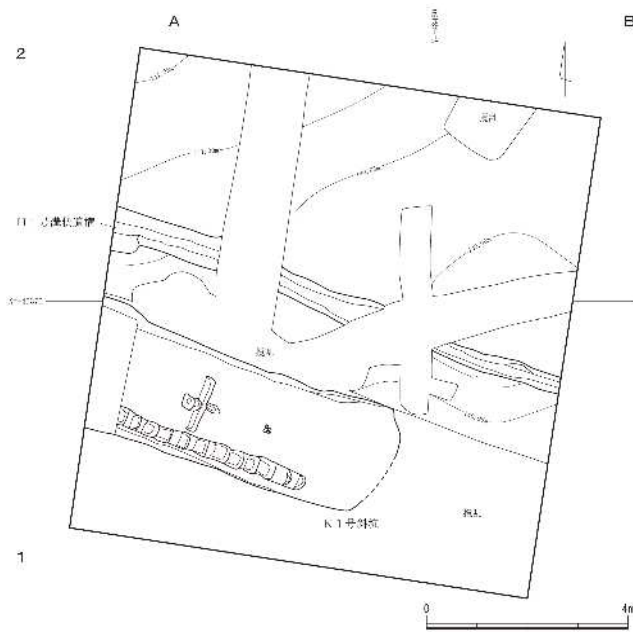
第1図 遺跡位置図 (1/50,000)

**近代** 斜坑1基を検出しました。構造的には西方向に下る直線的な斜路で、南側壁際には同方向に下る地山作り出しの階段、中軸線付近には複数の小ピット、斜面中腹には斜路に直交する小規模な段切りを有しています。斜坑とは、大規模な地下工事ないしは堅坑工事の際に人員・資器材の出入、掘削ポイントの追加、発生土の搬出、換気などを主目的に掘削される傾斜した坑道の総称です。本遺構は斜坑の坑口部分に該当するものと推定されます。遺物については、アルミニウム製品（玩具—ミニチュア羽釜）、鉄製犬釘、鉄製丸釘各1点が出土しました。アルミニウム製品の年代観から、概ね昭和10年代の埋没時期が想定されます。

**奈良・平安時代** 東西方向の溝状遺構1条を検出しました。遺物は平安時代前期に属する須恵器坏、灰釉陶器壺が各1点、詳細時期不明の土師器細片4点が遺構外から出土しました。

**縄文時代** 中期～後期と推定される集石址1基、早期と推定される陥し穴3基、土坑1基、ピット1基を検出しました。出土土器の総点数は724点を数え、時期的には草創期末～後期にわたります。このうち主体をなすものは後期堀之内式土器です。また、中期五領ヶ台式期の人面装飾付土器人面部1点が含まれています。出土石器の総点数は108点を数え、器種としては石鏃・削器・打製石斧・礫器・敲石・凹石・磨石・石皿・台石・剥片類などがみられます。

**まとめ** 今回の調査では、近代、奈良・平安時代、縄文時代に属する遺構と遺物が発見されました。このうち近代に属する斜坑は、「相模川河水統制事業」の一環で実施された谷ヶ原浄水場建設工事（昭和15年着工）、ないしは横浜・川崎水道共同導水隧道（相模隧道）掘削工事（昭和17年着工）に関連する施設と推定されます。（中村哲也）



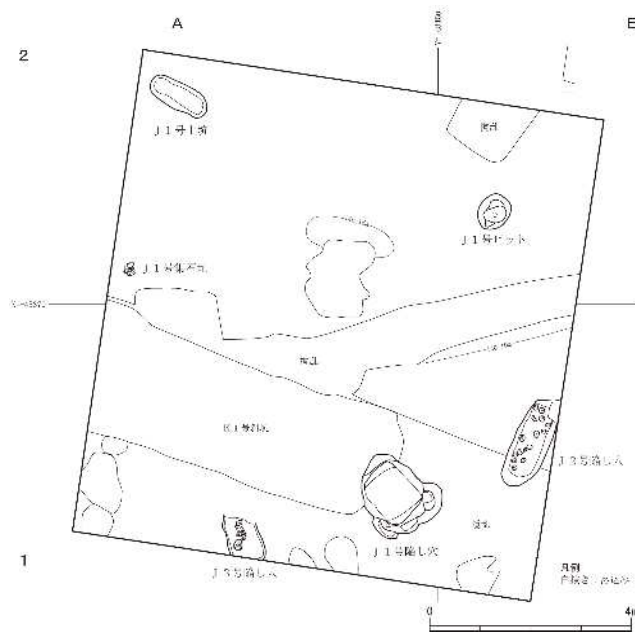
第2図 奈良・平安時代～近代遺構配置図 (1/150)



写真1 近代の斜坑 (K1号斜坑)



写真2 K1号斜坑の階段部



第3図 縄文時代遺構配置図 (1/150)



写真3 縄文時代の遺物出土状況



写真4 縄文中期の人面裝飾付土器人面部



渋田川両岸に位置する立地の異なる3地点の遺跡調査

にしとみおか なかじま にしとみおか ながたけ  
**西富岡・中島遺跡第3次調査、西富岡・長竹遺跡第6次調査**  
にしとみおか ながたけ  
**西富岡・長竹2遺跡第2次調査**

**所在地** 伊勢原市西富岡中島、西富岡長竹

**調査期間** 平成30年11月15日～  
令和元年7月12日(予定)

**調査面積** 西富岡・中島遺跡第3次調査 1,460.9㎡  
西富岡・長竹遺跡第6次調査 68.6㎡  
西富岡・長竹2遺跡第2次調査 408㎡

**調査組織** 株式会社パスコ

**担当者** 相川 薫・丸山清志

**調査概要** 今回の調査は丹沢山塊東端大山の東側にあり、渋田川を境に、左岸低地の西富岡・中島遺跡と右岸側上粕屋扇状地縁辺の西富岡・長竹、同・長竹2遺跡の3地点となります。縄文時代から近世までの遺構と遺物が確認されました。



第1図 遺跡位置図(1/50,000)

**西富岡・中島遺跡第3次** 【近世：溝状遺構2条、段切り状遺構2箇所、中世：溝状遺構13条】

この他にトレンチ調査からは幾筋もの流路の痕跡が確認されました。遺物の中・近世の陶磁器類が多く、銅銭・煙管・石臼のほか、奈良・平安時代の須恵器・土師器も少量ですが出土しています。トレンチ調査からは、中世と考えられる漆碗破片・箸・木杭等の木製品が出土しました。また流れ込みと思われる縄文時代後期の土器少量と、石皿も出土しています。

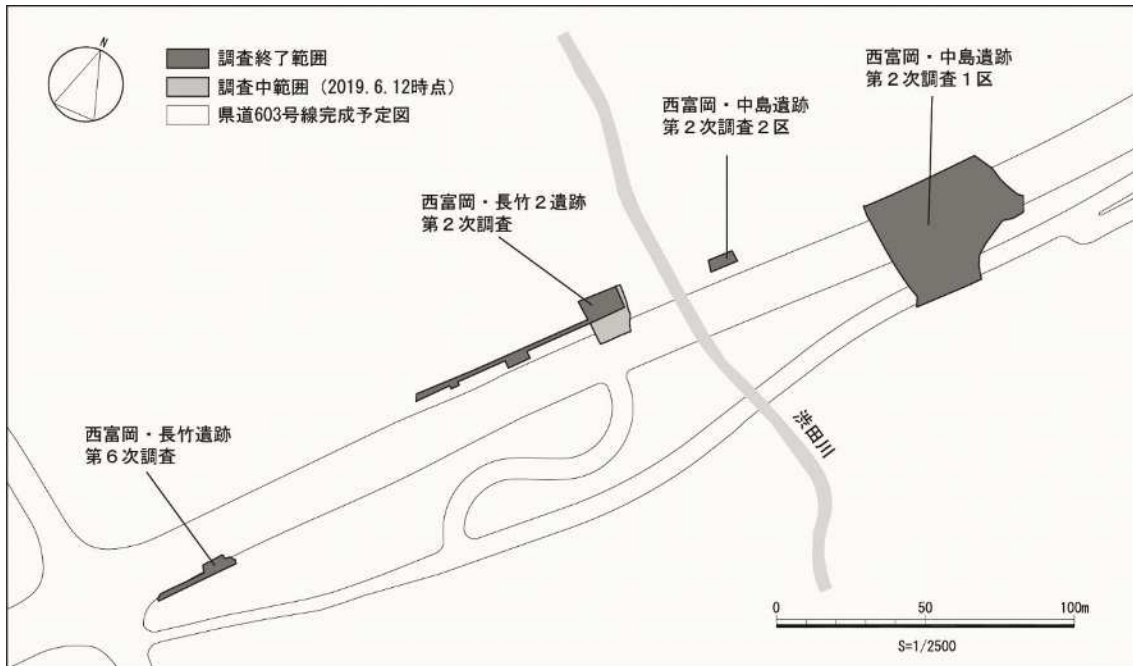
**西富岡・長竹遺跡第6次** 【近世：溝状遺構3条、不明遺構1基、縄文時代：土坑6基】北東に隣接する、第4次調査区からの続きの遺構調査を主に行いました。遺物は近世の燈明皿・香炉・碗等の肥前系や瀬戸美濃系陶磁器のほか、中～後期の縄文土器も多く出土しました。

**西富岡・長竹2遺跡第2次** 【近世：畝状遺構1箇所、土坑：6基、不明遺構1基、中世：土坑5基、土坑2基 奈良・平安時代：竪穴住居1軒、円形土坑2基、土坑3基、不明遺構1基、ピット49本】竪穴住居址は台地の平坦部に位置し、10世紀頃の土師器坏が出土しました。東に拡張し調査しましたがカマドは確認されず、西側にあると考えられます。近くに円形土坑と呼ばれる真円に近い土坑2基が検出されています。北側斜面には同時期のやや大きなピットが5本検出され、掘立柱建物址となるか確認するため、現在拡張調査中です。さらに下層では、縄文時代後期の土器が多く検出されましたが、住居跡等の遺構は確認されませんでした。また、旧石器時代の試掘坑1箇所も調査しましたが、遺物は確認されませんでした。(現在調査継続中のため、遺構数は暫定)

**まとめ** 立地の異なるそれぞれの遺跡からは、立地の特徴となる遺構・遺物が検出されています。西富岡・中島遺跡トレンチ調査出土の木製品、長竹2遺跡の平坦面に位置する奈良・平安時代の住居址と、斜面地に流れ込んだと考えられる縄文土器があります。また、今回調査した3遺跡とも出土した縄文土器は後期が主であり、周辺にこの時期の集落が存在した可能性も考えられます。

(相川 薫)





第2図 西富岡中島遺跡第3次、西富岡・長竹遺跡第6次、西富岡・長竹2遺跡第2次調査区



写真1 西富岡・中島遺跡第3次調査全景



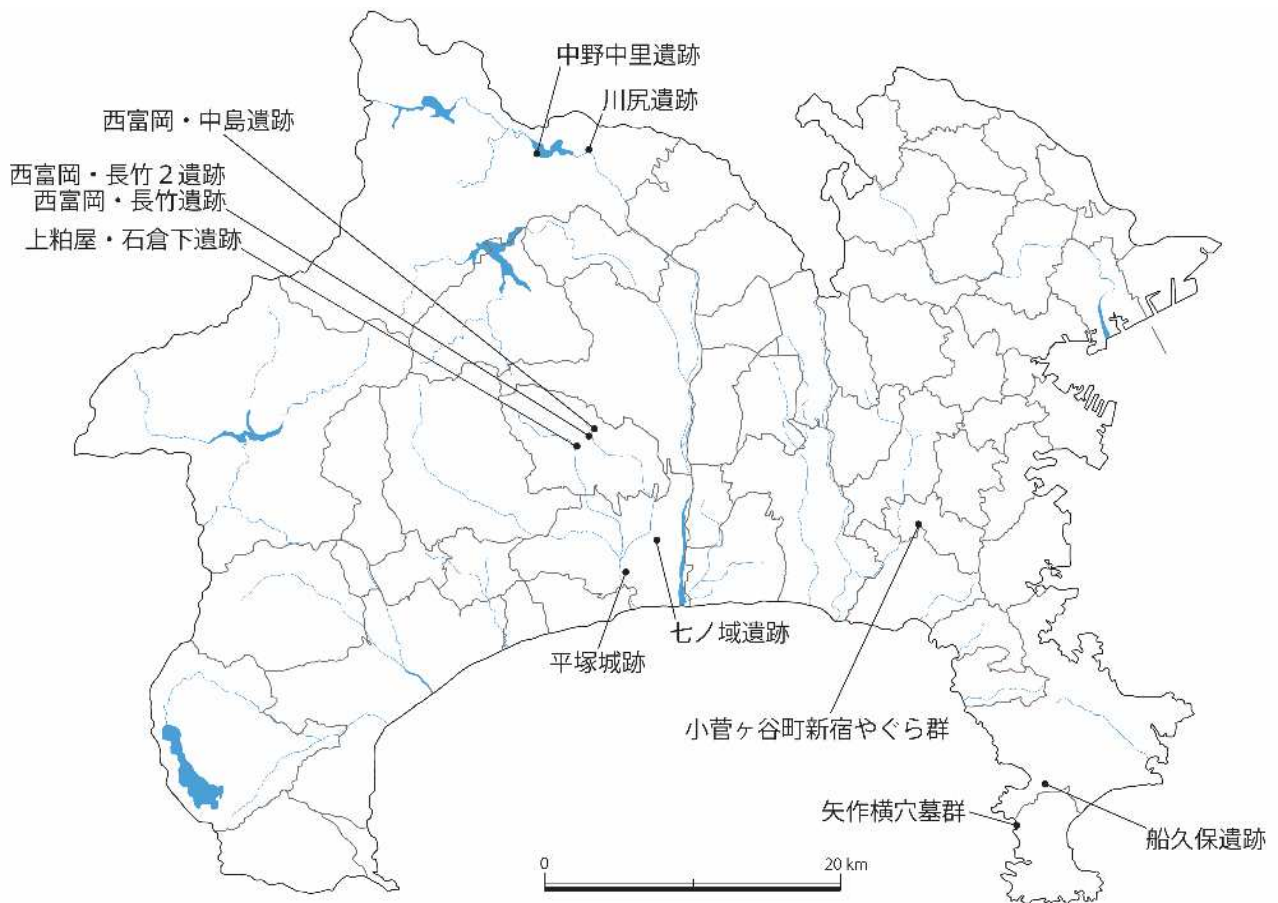
写真2 西富岡・長竹遺跡第6次調査全景 (南から)



写真3 西富岡・長竹2遺跡第2次 1号住居跡



写真4 西富岡・長竹2遺跡第2次 出土遺物



今回発表の遺跡

神奈川県発掘調査成果発表会は、神奈川県が行う事業に伴って実施された発掘調査の最新の成果を一般の方々に公開し、埋蔵文化財への理解を深めていただくことを目的としています。

令和元年度 第3回考古学講座  
神奈川県発掘調査成果発表会 2019

発行日 令和元(2019)年7月27日

編集・発行 神奈川県教育委員会 教育局 生涯学習部 文化遺産課

中村町駐在事務所(神奈川県埋蔵文化財センター)

〒232-0033 神奈川県横浜市南区中村町3-191-1

TEL 045-252-8661

FAX 045-252-8663